



全国選抜高校テニス大会

《 春一番! 高校テニスセンバツ 》

第4 1回大会を機に大会実施に向け改革すべく初の試みが多く取り入れられた。その一つがこのキャッチフレーズである。一般公募の作品の中から選ばれたこの言葉を大切に育てていきたい。

今後も春一番といえば高校生の選抜テニス大会であるという認識を世間に広めていきたい。

《 出場校選考会 》 1月28日(月)

前回の記念大会を終え、出場校は従前の男女各48校となった。各地区の出場枠を見直し、選考委員会枠も含め出場校が決定した。また、シードは4校から8校に増え各地区の上位校が名を連ねた。



《 組合せ抽選会 》 2月24日(日)

前回までは開会式後に各校の主将による抽選会であったが、次の日からの試合に向けてのコンディション造りの難しさや応援体制の大変さなどを考慮し、大会1か月前の抽選会となった。WOWOWによるライブ配信も話題となり全国の学校関係者だけではなく多くの人々にも高校選抜テニスの存在を知らしめた。

《 開会式 》 3月20日(水)

晴天のもと3年ぶりに博多の森テニス競技場センターコートで開会式を実施。男女各48校の選手達が地元飯塚高校吹奏楽部の演奏により、出場の喜びを胸に堂々と入場行進をし、カラフルなユニフォーム姿がスタンドを埋め尽くした。古賀大会会長あいさつ、来賓としてスポーツ庁より

審議官藤江様、公益財団法人日本テニス協会よりデビスカップ監督の岩渕様を始めとして、今大会を支えていただくたくさんのパートナーが紹介され激励のお言葉をいただいた。

選手宣誓に選ばれたのは初出場を果たした男子北海道立命館慶祥高校、佐藤滉祐主将と平成時代に最多出場となる女子福井県仁愛女子高校、吉田華菜子主将。震災を乗り越えたことや、平成最後の区切りの年にコートに立てる喜びを声高らかに選手を代表し宣誓した。

その後、20回、30回、40回出場校の表彰も行われ開会式を閉じた。



《 団体戦 》 3月21日(木)～25日(月)

初日から肌寒い日もあったが、天候に恵まれ順調に試合が始まった。

男子ベスト8はシード校である相生学院(兵庫)、湘南工科(神奈川)、四日市工(三重)、大分舞鶴(大分)、慶応義塾(神奈川)、柳川(福岡)と接戦をものにした敦賀気比(福井)と力を見せつけた名経大市邨(愛知)。準決勝をともに3-1で勝ち上がり決勝に駒をすすめたのはトップ1・2シードの相生学院と湘南工科。WOWOWライブ配信の中、屋内コートでの戦いは3面進行。相生学院が全てファーストセットを先取して優位な展開となる。S1がセカンドセットを失うもD1、S2に続きダブルスの攻撃力とネットへの詰めに優る相生学院がD2を勝利し3-0で2年ぶり4回目の優勝を果たした。

女子の戦いは実力伯仲となった。ベスト8はシード校の相生学院(兵庫)、法政二(神奈川)、沖縄尚学(沖縄)、四日市商(三重)、野田学園(山口)と1回戦から伝統校対決を制しミラクルで勝ち上がった椋山女学園(愛知)、トップ4シードの松商学園(長野)を破った愛知啓成(愛知)。愛知県対決を制した椋山女学園を破った相生学院とトップ2シードを破った沖縄尚学が決勝に進出。S1・S2を勝ち王手をかけた相生学院に対し、沖縄尚学はNo1とNo2をD1に起用し後半勝負の作戦に出た。しかもD2を取り勢いに乗る。D1は朝9時30分より始まり気がつけばファイナルセットタイブレークにもつれる大接戦。1ポイント1ポイントに勝利の神様が揺れ動く中、15-13で4時間越えの死闘を制した相生学院が3連覇を達成した。



《 個人戦 》

3月23日(土)～26日(火)

例年通り団体戦敗者校の登録No.1選手による個人戦が予選は春日公園、本戦が博多の森で行われた。団体戦上位進出校は連戦の疲れもあり思うような結果につながらない選手も多く、男女とも誰がUSオープンのチケットを勝ち取るかが見えない展開となった。

男子ベスト6は高畑里玖(相生学院)、太田 空(四日市工)、藤原智也(東山)、山口柚希(鳳凰)、影山太星(名経大市邨)、田中瑛大(湘南工科)。団体決勝を戦った二人にストレート勝ちをした太田VS影山という東海対決となるが影山が圧勝し、アメリカ行きを決めた。特に影山は終始冷静なプレーで主導権を握り、コートカバーリングの良さと相手コートにボールを打ち返す技術の高さは圧巻で、観客を魅了するものがあった。

女子ベスト6は松下菜々(相生学院)、大川美佐(法政二)、神鳥 舞(早稲田実業)、山口瑞希(城南学園)、徳安莉菜(野田学園)、高岡鈴蘭(沖縄尚学)。決勝は準決勝を競り勝った松下と予選からの7試合を勝ち上がった山口。お互いに攻撃力を持ったプレーを随所に見せたが、強打のストロークをクロスコートに打ち切った山口がファイナルセットを制しUSオープンのチケットをつかんだ。



《 終わりに 》

今回の大会運営は選手ファーストに近づく改革がなされた大会だった。大会本部が室内コート前に設置され、とてもわかりやすい位置となり参加校からも好評だった。ラインワークスといった情報伝達機能を使用して監督への連絡を行ったり、スコア速報をリアルタイムに出せるようになった。スコア速報は地元柳川高校マイクロソフトコースの生徒によるもので、おとな顔負けのスピードと正確さであった。

団体戦や個人戦準決勝・決勝は全て地元高校生による審判であった。昨年12月より講習会を何回も繰り返し、自信を持って声高々に立派なジャッジをする姿は観客にも伝わったであろう。閉会式後に高校生審判の反省会をしている時、男子優勝の影山選手が審判員に感謝の言葉を伝えに来たことは審判を務めた高校生もやった甲斐があったと実感したであろう。

個人戦の第3位表彰は準決勝終了後に行われ、関係者は余裕を持って帰路につけた。

最終日には各メーカーの協力を得て地元のジュニア選手対象にテニスクリニックも開催した。たくさんの男女中学生・高校生が参加し、楽しそうにボールを打っていた。

天候に恵まれた平成最後の大会となったが、令和の時代も積極的に改革を重ねる春一番！高校テニスセンバツを盛り上げていきたいと思う。

